

緑のまきば

1987 No. 25

小金井緑町教会
小金井市緑町四一十六一三三
電話〇四三一一八一七九六一
編集・牧師 山本圭一

もろもろの王の王

(サムエル記上 16章 1-13)

教 説

山本圭一

ベツレヘム。長い教会の歴史の中で、いずこのキリスト者も、天のみ使たちすら、耳をそばたてる場所。マリヤが月満ちて、初子を産み、布にくるんで飼葉おけの中に寝かせた——あの救主誕生の事件のあつた村里である。このベツレヘムの町は、イスラエル民族の族長ヤコブの妻ラケルが旅の途中で12番目に生れた末子のベニヤミンを出産し、難産のため亡くなった場所でもある(創35章16-20)。さらに士師の時代、戦争のため夫を亡くしたモアブ出身の異国の女性ルツが姑に仕え、けなげに生きたのもベツレヘムであった。彼女はボアズという裕福な人に見出されて再婚し、その曾孫にダビデが生れた。紀元前千年頃のことである。救済史の壮大なドラマが人間の悲哀を包みつゝ展開する。

I 主は心を見る
ダビデが神の顧みを受け、脚光の中に登場するのもベツレヘムであつた。彼は予言者サムエルによつて王位に任ぜられようとしていた。しかしサウル王は依然、王の権力を握っている以上「サムエルは、サウルのために悲しんだ」。サウル王は神への不従順のゆえに斥けられるとはいへ、それを告げることが何とむごたらしく悲しいことであろうか。かつて、サムエルが少年時代、育てられた祭司エリにその家の没落を告げた悲痛な思いが彼に甦つたことであろう。しかも彼はすでに年老いていた。サムエルはベツレヘムへと出かけた。そこで羊や牛を飼うエツサイを探しあてた。その子らから王を選べば、サウル王への大逆罪となり殺されるかも? 「一頭の子牛を引いて行って『主に犠牲をささげるためにきました』と言いなさい」。サムエルが犠牲の祭りを行うのであれば抵抗は起るまい。逃れの道であつた。ベツレヘムに近づくると町の長老たちは青ざめた

表情で彼を迎えた。「穏やかな事のためにこられたのですか」。さらに新しい困難があつた。エツサイの八人の息子たちの中から一人の王をサムエルは選ばねばならぬ。練達の預言者も王選びに幾つかの失敗を犯すのである。長男エリアブを最初に見た時、堂々とした彼こそ王者にふさわしい風格の持ち主と思ひ込んだ。しかし、「顔かたちや身のたけを見てはならない」。神の眼には不適合なのだ。「わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見主は心を見る」(サムI 16章7)

II 神のユーモア
サムエルは七人の息子たちに次々と対面、しかし神の同意は得られない。「あなたの息子たちは皆ここにいますか」。父親エツサイに声をつまらせて彼は言った。末子がいいた。「血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人」ダビデが連れてこられた(12節)。そしてサムエルは神の示しの通り、立つて油を注ぎ王とした。そこに居あわせた人々は一樣に不満顔になつたにちがいない。
神のユーモア、神は人の知恵、世間の常識を笑つた。ダビデが王に選ばれたのは、血色がよく目がきれいで美しい姿であつたからではない。ただ憐れみに満ちた神の選びの意志のみが確く立つ。その証拠にダビデが王の権勢をほしいままにした時、部下ウリヤの妻バテセバを奪つたにかかわらず、罪深く取り去らるべき者を、神はただ憐れみ続け給うた(ロマ3章24)。
III 人の思いと混迷を越えて
ダビデは「愛される者」の意である。それがダビデの選びのすべてであつた。主イエスが弟子たちを選ばれた時「み心にかなつた者」として彼らを憐れまれたことが選びの基本であつたように。それは救済史を貫き、私たちに及ぶ教会の出来事である。「神はそのひとり子を賜つたほどに、この世を愛して下さつた」(ヨハネ3章16)それが私のすべて。そこに私のゆるぎない人生の支えがある。
サウル王は退けられ、精神は錯乱した。王を慰めるためにダビデは琴をひいた。退けられる王と選ばれた王の不思議な対面。やがてサウルはダビデを深く愛し、武器をまかせ、自らの命をも託するほどになつた。しかし人の愛は時に憎しみに急変する。ダビデはついにサウルに追われ狙われ続けた。しかし神のみ旨は人の思いと混迷を越えて成就した。もろもろの王の王、主イエスの来臨の背後に不動の神の救いの意志がある。心に銘記したいのはこの点である。